東大寺慶讃能

KEISAN-NOH

ごあいさつ

「東大寺盧舎那大仏の造顕を発願されました聖武天皇のみこころをしのび、大仏様に日本を代表する伝統芸能である『能楽』を奉納することで、共に生きる喜びを表現しよう。」

そのような思いから、春（聖武天皇をおまつりする「聖武祭」の日、例年5月2日）と秋（大詔を発せられた天平15年10月15日にちなみ、例年10月15日）に慶讃能を奉納させていただいて参りました。

盧舎那大仏造顕の発願から1283年の時空を超えた現代におきましても、国家の安泰と人々の幸せを願われた聖武天皇のみこころをしのぶことの大切さを、本慶讃能を奉納させていただきますことによって、多くの皆様に伝わりますよう心より願っています。

We have dedicated a NOH to the big BUDDHA to think of the emperor SHOMU, who proposed to build a big BUDDHA in Nara in the 8th century. He decided to carry out such a great project for the sake of calming some confusion caused by plague or disasters that had distressed people in those days. So, now we express our pleasure of life in peace by dedicating noh performance. The reason why noh is chosen for a dedication is it is the most traditional performance in Japan.

Twice a year (2, May and 15, Oct.), Todaiji temple performs noh for dedication. 2,May is the day of festival for emperor SHOMU, and 15, October is the day when the emperor made his desire public. It is 1283 years before when the big BUDDHA was planed to be built. We hope we will have conveyed the emperor's wish for peace and happiness in the nation in the years ahead.

二〇二六年十月十五日(木)　午後一時半始

大仏さま秋の祭り

東大寺慶讃能

於　東大寺鏡池特設舞台

（雨天　東大寺総合文化センター金鐘ホール）

ご挨拶　前後のいずれかで実施

仕舞

花筐　笠田　祐樹

船橋　井戸　良祐〇

山下あさの

生一　知哉〇

山田　薫

能

浮舟

山中　雅志〇

有松　遼一

森山　泰幸

貞光　智宣

茂山　忠三郎〇

荒木　建作〇

山下あさの

塩谷　恵〇

山田　薫

生一　知哉〇

井戸　良祐〇

笠田　祐樹

〇印は重要無形文化財総合指定保持者

主　催／東大寺慶讃能実行委員会　　主　管／奈良新聞社

協　賛／㈱柿の葉すし本舗 たなか・㈱尾田組・日本料理花鹿・菓匠 千壽庵吉宗

協　力／山中雅志・ひかり装飾株式会社

演目の説明

●仕舞「花筐」

越前国の味真野にいた男大迹の皇子が、帝位継承のため大和の都へ向かうことになり、使者に、日頃籠愛されていた照日の前に別れの手紙と花筐を届けるようにと命じた。照日の前は使者からわけを聞き即位を喜びます。しかし、照日の前は形見の花筐をかき抱いて一人取り残された悲しみに暮れ心乱しながら、物狂となる。その後、侍女を連れて大和の国へ向かって旅をします。

ちょうど帝も紅葉狩を楽しんでいる所に照日の前と侍女が帝の行列の前を横切ったために、官人が追い払う際に、侍女が持っていた花筐を打ち落としてしまい。照日の前は激しく官人に抗議。帝の前で舞を見せるようにと命じられた照日の前は、漢の武帝の后、李夫人の物語を歌った舞を舞った。

花筐を目にした帝は舞を舞っている女性が照日の前であることに気づき二人は再会をはたした。

●仕舞「船橋」

熊野の山伏が奥州平泉に向かう途中、村の男女が橋建立の勧進をしているところに遭遇した。山伏が「万葉集」の歌「東路の佐野の船橋とりはなし親し離くれば妹に逢わぬかも」について尋ねると、二人は船橋にまつわる悲恋の物語を語りはじめた。昔、川を隔てて人目を忍んで会っていた男女が船橋を通い路にして会っていた。

ある日、嫌う親に橋板をはずされ川に落ちて死んだと語り、男女は弔いを頼むと姿を消した。その夜、山伏が祈祷をはじめると、男女の霊が現れ男は死後も成仏することなく、苦しんでおり男は川に落ちたときの様子を再現して見せた。やがて山伏の法力によって成仏できた事に感謝を告げ、姿を消して行った。

●能「浮船」

僧は宇治の里にやって来た。地元の女に「浮舟」の事を尋ねると女は語り始めた。「浮舟は薫大将に愛されて宇治の里に隠れ住んでいたが、匂宮が忍びで訪ね浮舟を宇治川に誘い出し契りを結んだ。」（光源氏の没後、貴公子の後継者として薫大将と匂宮の2人がいました。匂宮の母親は光源氏の娘の明石の中宮で源氏の外孫にあたる。薫は朱雀帝の第三皇女で光源氏の継室で内大臣の柏木との間で出来た子共で幼少時は六条院の光源氏の豪邸で過ごし、年齢も1才違い。匂宮と薫は兄弟のような間柄。しかし、匂宮は天皇の子、薫は源氏の子で身分の相違がありました。）薫大将に申し訳なく思いつつも匂宮のことが忘れられず浮舟は死にたいと悩み、行方不明となった。入水を図ったとの噂もと語り終えた女は、小野の里に住む者と名乗って静かに消えて行った。僧は小野の里で浮舟を弔っていると浮舟の亡霊が現れ想い悩んだが、弔いを受けて執着が晴れたと僧に伝えて消えて行った。

※「浮舟」は『源氏物語』の【宇治十帖】に出て来る作品

●仕舞とは…能のみどころを抜粋して能装束を着けず、紋付袴等で演じる形式をいいます。

協力　山中雅志　ひかり装飾株式会社



なら本店 近鉄奈良駅前 行基像噴水前

営業時間：9:00～19:00　電話番号：0742-81-3651

献上 柿の葉すし本舗 たなか



柿の葉すし本舗たなかは
今年も慶讃能を応援しています。